

【研究ノート】

## ヨーロッパの説明社会学，分析社会学の 最近の研究動向（承前）

久 慈 利 武

前号に「ヨーロッパの説明社会学，分析社会学の最近の研究動向（以下前稿）」を掲載し読み返してみても、触れられなかったトピックがまだ大分残っていることに気づき、前稿のスタイルを踏襲して続けていきたい。

1. 前稿の校正進行中に、ディークマン/フォス共同執筆「ドイツ語圏における合理的選択理論の受容（2018）」が目にとまった。ドイツ語圏（ドイツ，オランダ，スイス）社会学に合理的選択理論を定着させるのに寄与した人たちとして、わたしが前稿で挙げた、オランダ説明社会学研究集団、カール・ディーター・オップの他、ハンス・ヨハヒム・フンメルとロルフ・ジグラーに触れている。ふたりはケルン大学の同窓で、ドイツにおけるフォーマルなモデル構築の定着に献身した先駆者である。フンメルは前稿で触れた、オップと共著で『社会学の心理学還元可能性（1971）』を著したその人である。フンメルは、前記の共著の他にも、ふたりの各自の論文ならびに共著論文を合本した著書『社会過程の説明の諸問題 I, II（1973）』、単著『多水準分析の問題（1972）』がある。ながらくデュイスブルク-エッセン大学に勤務して、そこに定年まで勤務した。

ロルフ・ジグラーはミュンヘン大学の教授を長く勤め、ベネチア夏期セミナーを長期に亘って主催し、フォーマルなモデル構築研究者を多数養成した。どんな人物がいるかは、前稿で触れたアンドレアス・ディークマン、トマス・フォスが共同編集したジグラー祝賀論文集を参照されたい。フンメルとジグラーは、ウェルナー・ライマース基金の後援を受けて、1974年から1982年までMASO（社会科学における数理モデルのためのワーキング・グループ）を主催した。その報告書を下に掲げる。第7回からはソデュールが新たに加わっている。

Mathematical Model in den Sozialwissenschaft MASO

第1回 1974 ロルフ・ジグラー編「社会的不平等と社会移動」

第2回 1975 ロルフ・ジグラー編「地位配分過程の分析」

- 第 3 回 1976 ロルフ・ジグラー編「社会科学と経済科学におけるシミュレーション手続きの使用」
- 第 4 回 1977 ジグラー, ハンス・ヨハヒム・フンメル編「社会的ネットワーク分析への数理の応用」
- 第 5 回 1978 ハンス・ヨハヒム・フンメル編「社会権力分析への数学的アプローチ」
- 第 6 回 1979 ハンス・ヨハヒム・フンメル編「社会変動分析への数理手続きの適用」
- 第 7 回 1980 フンメル, ウォルフガング・ソデュール編「社会構造の普及過程モデル」
- 第 8 回 1981 ウォルフガング・ソデュール編「組織構造と組織過程の数理分析」
- 第 9 回 1982 ウォルフガング・ソデュール編「社会行動の経済学的説明」

ゲスト Peter M. Blau, Raymond Boudon, James Coleman, Mark Granovetter, Gudmund Hernes, Edward O. Laumann, Siegwart Lindenberg, Peter Marsden, Anatol Rapoport, Aage Sorensen, Gordon Tullock, Harrison White

最終回の報告書に記載のバックナンバーをもとに記述。ゲストは特集に関係のあるテーマにのみ呼ばれている。ゲストの発表原稿は他の雑誌に発表されたものがほとんどで、このワークショップのために独自に発表されたものは見あたらない。

MASO を主催した 3 人は、1982 年の終了の後、1984 年から、社会的ネットワーク研究集団を立ち上げる。メンバーに Franz Urban Pappi, Peter Kappelhof, Norman Braun が加わる。この活動については、ジグラー (2011) が参考になる。

2. ディークマン/フォスの前記論文 (2018) において、ドイツ社会学に合理的選択理論を定着させるのに寄与した人物としてほかに、ビクター・ファンベルクが挙げられている。彼はジョージ・カスパー・ホーマンズの社会学の心理学還元可能性を論じた諸論文 5 編を独訳編集した『社会学理論の基本問題 (1972)』、ジェームズ・コールマンの『権力と社会の構造』の独訳 (1979)、ガリー・ベッカーの『人間の経済行動』の独訳 (1982)、自身の博士論文『二つの社会学：社会理論における個人主義と集合主義 (1975)』、教授資格請求論文『市場と組織：個人主義社会理論と団体行為の問題 (1982)』で寄与している。

ファンベルクは 1943 年生まれで、ミュンスター大学でデュプロマを修了した後、1975 年の著書で、ベルリン工科大学から博士号、1982 年の著書でマンハイム大学から教授資格認定を得ている。ジェームズ・ブキャナンの招きで、1983 年から 1994 年までアメリカのジョージ・メソン大学の公共的選択センターに在籍、准教授、教授を歴任、1995 年にドイツ・フライベルク大学のハイエクから自らの後任として政治経済学講座に招聘される。公共選択

センター滞在中英文で執筆した論文は『経済学におけるルールと選択 (1994)』にまとめられている。

ジョージ・カスパー・ホーマンズを高く買っている点, ポパー, アルバートの系譜を継ぐ科学哲学, 科学方法論に精通している点, ハンス・アルバートの監修する社会科学の統一シリーズ (チュービンゲン: モールジーバック社) から著書を出版している点, 筆者はオップとファンベルクに目に見えないつながりを感じてきた。ファンベルクの教授資格請求論文のプロモーターが, マンハイム大学のハンス・アルバートであった。ファンベルクはホーマンズ『社会学理論の基本問題 (1972)』の訳者あとがき論文「社会学における行動論的アプローチ」, 博士論文『二つの社会学 (1975)』でファンメル/オプの『社会学の心理学還元可能性 (1971)』を高く評価している。

またファンベルクがドイツに留まることができない事情ができた際に, ジョージ・メーソンの公共的選択センターにジェームズ・ブキャナンがどうしてファンベルクを誘ったのか, ずっと疑問であった。その疑問は水解した。チロル地方アルプバック・ヨーロッパ大学週間に, 何年間に亘って哲学者カール・ポパー, ハンス・アルバート, フェイヤー・アーベント, ラドニツキー, 経済学者ジェームズ・ブキャナン, ブルーノ・フライ, 社会学者オップ, ファンベルク, 心理学者ボルフガング・ストレーベが集って経済学と社会学のモデル, 人間像をめぐる議論を積み重ねてきたということである。(この情報もとは Diekmann/Voss 2018)。時期が述べられていないが, ネオ・ポリティカル・エコノミー年誌にオップ, ファンベルクが掲載したり, フライ, ストレーベとオップが, ブキャナンとファンベルクが共同執筆している時期から推察すると, 1978年から1982年と推察される。社会学者で参加したのはオップとファンベルクのみであった。ジェームズ・ブキャナンに招聘されてファンベルクが1983年から1995年までドイツを離れ, ジョージ・メーソン大学公共選択センターで研究生生活を送った事情もこの人脈が関係していたのである\*。

\*ファンベルクの博士論文と教授資格請求論文の内容は, 拙著『現代の交換理論 (1988)』(新泉社) 第5章「個人主義的交換理論の拡張 集合行為者モデル」に詳しい。

また *Rules and Choice in Economics* の拙書評は, 『理論と方法』1996年11(2): 78-80に載っている。

3. 1984年にドイツ社会学者とアメリカ社会学者がドイツのシュロス・ラウイッシュホルツハウゼン Schloss Rauischholzhausen で, ミクロ-マクロ・リンク会議を開催した。それは1987年に著書として出版された (J.C. Alexander et al. (eds.) *Micro-Macro Link*)。それに参加したドイツ研究者がミクロ-マクロ・リンク研究サークルを結成し, 1987~1990年の毎年研究発表会を持った (Manheim (1987), Köln (1987), Koblenz (1988), Manheim (1988), Utrecht

(1988), Zürich (第 24 回ドイツ社会学会 1988), Köln (第 25 回ドイツ社会学会 1989), Koblenz (1989), Frankfurt (第 26 回ドイツ社会学会 1990))。マイクロ-マクロ・リンク研究サークルの参加者は Andreas Diekmann, Georg Erdmann, Hartmut Esser, Ulrich Mueller, Werner Raub, Peter Schmidt, Klaus G. Troitzsch の 7 人である。討議されたテーマは、理論構築、モデル構築、人間像、行為理論、協力ないし社会秩序形成問題であった(この情報もと Maurer 2017)。またドイツ社会学会に 1992 年に「モデル構築とシミュレーション」部会が設置されるが、部会設立を呼びかけた学会同人はこの研究サークル・メンバーが中心であった。彼らは、その前年にハルトムート・エサー & クラウス・トロイツシュ編『社会過程のモデル構築：社会学理論構築のための新しいアプローチと移植』を刊行するが、これが部会設置に大いに力を貸したのであった。

4. 前稿で、リンデンベルクがコールマンに、マクレランドの逆台形図形を教えたことをラオプ/フォスが語ったことに触れたが、リンデンベルクがコールマンに教えたのはいつであったかに触れなかった。ラオプ/フォスは、コールマンが逆台形図形を最初に発表した論文は、1984 年ヘンリック・クロイツが創設した応用社会研究所機関誌『応用社会研究』12 卷 1/2 合併号「ミクロな基礎とマクロな社会行動」であることに触れている。次いで 1986 年に出版されたコールマン、リンデンベルク、ノバク共編『社会理論における諸アプローチ』掲載「ミクロな基礎とマクロな社会理論」、アレグザンダー他編で 1987 年に出版「ミクロ・マクロ・リンク」掲載「ミクロな基礎とマクロな社会行動」、活字としての掲載は『応用社会研究』12 卷 1/2 合併号「ミクロな基礎とマクロな社会行動」に後れを取るが、『社会理論における諸アプローチ』のワークショップ開催はシカゴで 1983 年 11 月 9-12 日である。ドイツ社会学者・アメリカ社会学者合同会議「ミクロ・マクロ・リンク」のワークショップ開催はドイツ・シュロス・ウィッシュハウゼン 1984 年 6 月 21-26 日である。逆台形・ダイヤグラムの公表は『応用社会研究』掲載より先である。

もうひとつ、疑問がある。コールマンにマクレランドの逆台形図形を教えたリンデンベルクがなぜ自分でそれを使わないのか。リンデンベルクが架橋問題、集計問題を最初に語った論文は 1976 年の「集合現象の理論構造 (オランダ語)」(その趣旨をドイツ語で書いたのが 1977 年の「個人的事実と集合現象と変換の問題」)である。リンデンベルクはマクレランドの逆台形図形をコールマンに伝えながら、自身は逆台形図形を採用しなかった。リンデンベルクのマイクロ・マクロリンク図形はより複雑である(図 3)。ヘンベル・オープンハイムのカバーリング法則の演繹形式を採用しているためである。その図式を簡略にしてコールマン・ダイヤグラムと同型であることを証明したのがラオプ他(2011)である(図 1, 2)。

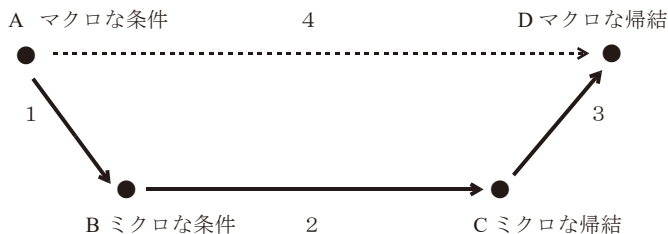


図1 コールマン図形

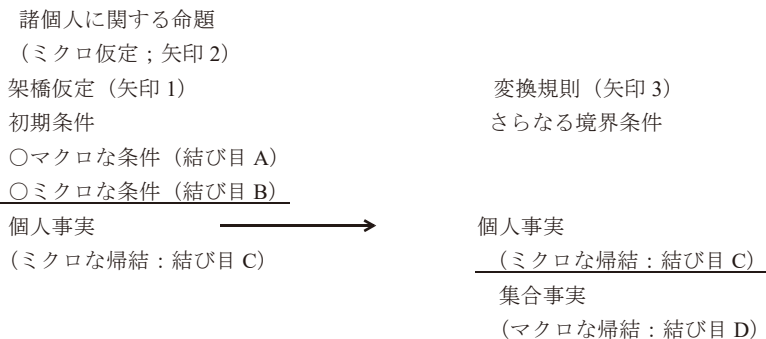


図2 コールマン図形の結び目と矢印への言及を含めた Lindenberg のスキーム (Raub et al. 2011 : 10, 2017 : 23)

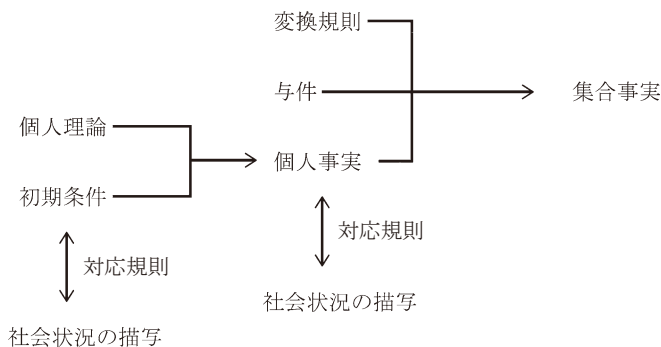


図3 変換規則と対応規則 (Lindenberg 1976 : 3, 1978 : 222)

ラオプ/フォスがリンデンベルクに、コールマンにマクレランドの逆台形図形を教えたことを確認を取ったことをはっきり語っているのは、2016年の論文であるが、マクレランドの逆台形図形をコールマンのそれと酷似していることを最初に指摘したのは、ブリューデル (Brüdel 2004 : 175) である。その論文が収録されているロルフ・ジグラーの退職記念論集を編集したのが、ディークマン/フォスである。編著の序論で、彼らはマクレランドの逆台形図形とコールマンのその酷似を指摘している。彼らがそれをブリューデル論文から教わったのかは不明である。ただフォスは1980年前後から、後述のラオプと親しく、多数の

共著論文を發表していることから、フォスがラオプから教えてもらった可能性は高い。

彼らと別に、オプもマクレランドの逆台形に気づいている (Opp 2009, 2011)。オプがそれを知ったのは、スペイン社会学雑誌 2006 年掲載の、フィリポ・バーベラが、リンデンベルクとの個人通信で「コールマンにマクレランドの逆台形図形を教えたのがリンデンベルクである」と確認を採った記述を目にしたためである。バーベラはどういうきっかけでマクレランドとコールマンの図形の類似を知って、リンデンベルクに確かめようとしたのであろうか。それはそのような噂がすでに蔓延していたからであろう。イタリアの分析社会学者のバーベラはリンデンベルクと接点はない。噂の発生元として考えられるのは、分析社会学ヨーロッパネットワークに加入し、大学で当番校を引き受けているユトレヒト大学のラオプである。ラオプの所属するユトレヒト大学とリンデンベルクの所属していたフローニンゲン大学は 1986 年以来連合大学院を構成していて、両者はインフォーマルにもコミュニケーションを取り合っていたのである。リンデンベルクに確認を取ったのがラオプで、そのラオプにリンデンベルクに確かめるように依頼したのがリュードマンの寄稿を見たフォスであろうと推察される。

5. 前稿でラオプ等が 2011 (Raub et al.), 2016 (Diekmann/Voss), 2018 (Raub/Voss) 論文を執筆したのは、オプ (2009) を意識したからだと述べた。オップはこの論文をフンメルの名誉教授授与式での自分のスピーチを再録したものだとして断っているが、それは論文全体でなく「ドイツ連邦共和国における個人主義プログラムの開始とその後の展開」の箇所を指しているものとおもわれる。ケルン大学の助手時代、フンメルと共著した草稿をめぐって教授のルネ・ケーニツヒと確執があったことおよび西ドイツにおける個人主義プログラムの展開とその中心に自分がいることの自負がその節の主内容である。あくまでも主人公はオプである。しかし、フンメルの祝いの席ということを考えると実際のスピーチ内容は、主賓のフンメルを称える内容であったものと想像される。自分はケーニツヒとそりが合わなくてケルン大学を去ってエアランゲン・ニュルンベルク大学に移ったのにフンメルは留まったことや、ケーニツヒの編纂した全 2000 頁二巻の『経験的社会調査ハンドブック (1969)』の裏方の手伝いを自分は敬遠したのに、フンメルは 120 頁の長論文「社会行動論への心理学的アプローチ」を寄稿していること、ケーニツヒ著作集 (全 13 巻) のなかの一卷を編集していることなどだったことが想像される。

オプが自己の立場を一方的に正当化し、オランダ・ドイツの説明社会学グループの個人主義プログラムを一方的に批判していることに直面して、オプに一方的に勝手なことを言わせておけない、もっと均整のとれた「ドイツ連邦共和国における個人主義プログラムの開始と

その後の展開」史を書くことを思い立たせたものと想像される。

オップが2009年の論文で、自分の1979年の著作に対するラオプ&フォス(1981)の批判を30年も経って蒸し返しているのを目にしたからである。オップのそれは実は反論になっていない。リンデンベルクと自分のは同じでないかという強がり、ラオプ&フォスの批判の論点をまったく理解していないのである。オプがケルン大学で助手時代の個人主義説明プログラムとその支持者(ハンス・アルベルトのアプローチへの共鳴者)の回顧録を持ち出したのが、ラオプ/フォス(2018)、ディークマン/フォス(2016)に回顧録を提出させる呼び水となったのである。

6. 前稿で、マリオ・ブンゲがいわゆるコールマン・ダイヤグラムをブードン-コールマン図形と呼称していることに触れた。前掲のラオプ/フォスがコールマン・ダイヤグラムの前身としてあげているブードンの図形はBoudon [1979] 1981である。次の関数式はBoudon 1986 [1984], 1987である。前者はコールマン・ダイヤグラムと共通な部分は、結び目A, D, 矢印1, 3であるのに対して、後者は矢印4を欠くだけで、結び目のすべてと矢印の3つを備えている。

ブードン  $M=M(m)$  被説明項は行為の関数である コールマンの(矢印3)

$m=m(S)$  行為は状況の関数である コールマンの(矢印2)

$S=S(P)$  状況は何らかのマクロ変数の関数 コールマンの(矢印1)

7. 5年前の退職記念論文で、筆者はオップ、リンデンベルク、エサーの間の批判の相互応酬を取りあげた。それでは、ブードンと上記三者の間では、批判の相互応酬は存在しなかったのか。三者からのブードンに対する批判は存在するが、ブードンから三者に対する批判、三者からの批判に対する自己の立場の擁護は存在しない\*。

\*そもそもブードンはウェーバーの合理性類型に依拠しており、合理性を経済学、功利主義の用具的合理性に限定することに反対の姿勢を取っている。その点で仮にブードンが彼らを批判するとしたら、用具的合理性に限定することに厳しい態度を取ったであろうと想像される。

ブードンの認知的合理性(用具的合理性に限定せず価値合理性、認知的合理性にまで一般化する)姿勢に、後者たちによる用具的合理性を擁護する反論が存在する。

リンデンベルクは前記2000年のブードン祝賀論文集の寄稿、「合理性の拡張: フレーミング対認知的合理性」で、エサーはオップ祝賀論文集およびシュルフター祝賀論文集寄稿「価



値合理性」で展開している。エサーのブードン批判の論旨は、リンデンベルクの主張への共感であり、リンデンベルクとエサーに違いは見られない。

ウェーバーの合理性論を取りあげているブードンの論文を収録しているのがブードン『価値の起源 (2001)』であるが、イエンス・グレベがケルナー誌に掲載した「価値合理性と目的合理性のひとつの行為モデルへ統合するための新たなアプローチ (2003)」で、ブードンのウェーバー論、リンデンベルク、エサーのブードンの認知的合理性批判を整理している。ただしリンデンベルクのは「目標フレーム論」でなく、その前身プロスペクト-弁別モデルである。グレベは、ブードンの合理性の一般化より、リンデンベルク、エサーの用具的合理性擁護を支持する。そしてリンデンベルクの弁別モデルよりも、エサーのフレーム選択モデルの方が価値合理性をうまく整理できると評価するが、新たな課題を抱えていると語っている\*。

\*グレベの論文の翻訳を人間情報学研究第 14 巻 (2009) に掲載した。

オップのブードン認知合理性批判は、スペイン社会学雑誌「ブードン追悼特集号」に寄稿した「何でも説明する：レイモン・ブードンの社会理論の批判的分析」である。ブードンの認知的合理性論はあらゆる行動、態度を説明すると主張しているものと受け取り、ブードンの認知的合理性でアプローチできないものを引き合いに出し、バランス理論と価値期待理論（経済学の主観的期待効用理論のドイツ心理学版）で説明できると主張し、実際に試論を提示する。またブードンの合理性論は効用最大化を拒否すると宣言していながら、密かにそれを用いていると批判する。自分の利益にならないのになぜ一般人は不正に憤るのか、一般人は良識 (bon sense) を持ち合わせているのか、ひいては健全な共通感覚 (common sense) を持ち合わせているのか、感情的にならずに理性的に行動できるのか、を追求するブードンの問題意識とずれを感じる。

ブードンの合理性概念の拡大に対して、彼の最終的橋頭堡である、行為者がそうしたのは十分な理由 *good reasons* があったからだ、その理由は通個人的に理解、了解できるものだ、という理解の方法に行き着く。十分な理由 *good reasons* を見つける科学的手続きが提示されないことで、多くの賛同者を集めるに至っていない。

8. 全 6 部, 37 章, 1000 頁の社会科学のモデル構築とシミュレーションのハンドブックが 2014 年に登場した。各部は全体の序章を除くと、「モデル構築とシミュレーションのメタ理論, 方法論をめぐる議論」「様々のモデル構築」「種々のシミュレーション・アプローチ」「社会秩序と社会構造の領域」「社会変動の領域」の各部からなる。「社会変動の領域」は「イナ



バージョン」「社会普及モデル」「模倣と同調」「集合行動」「社会的影響力モデル」「移住」「交渉」「武力と戦争」。「社会秩序と社会構造の領域」は「社会的ジレンマと協力」「社会規範」「社会的ネットワーク」「情報とシグナル」「互酬と評判」「公正」「コミュニケーション」「支配と組織」からなる。

前稿で、オランダ説明社会学グループの『合理的選択社会調査ハンドブック』を書評したライプチヒ大学のバーガー & チュテクを見当違いのコメントをしていると揶揄したが、彼らはその書評でオランダ・グループのハンドブックよりもこちらのハンドブックの方が優れたものとして推奨している。カバーする範囲の網羅性とオランダ、ドイツ、スイスの社会学者の総力を挙げて執筆していること、オランダのハンドブック執筆陣もこの執筆に参加している。両者を比較すると、アプローチも対象領域も前者の局所的な面がどうしても目に付いてしまう。精鋭、脂ののった全盛期の研究者に実質的な部分を任せ、オップ、シュミットの大家はメタ理論、方法論議論に押し込めている。編者はエアランゲン・ニュルンベルク大学ニコル・サームとミュンヘン大学ノーマン・ブラウンであるが、2013年に死去しているブラウンの名は執筆者としてはどこにも見あたらない。一方の編者サームは、編集段階に参画したブラウンを編集者の筆頭に挙げて、ブラウンの尽力を称えている。

実は前記の書評者バーガー & チュテクは、その書評末尾で優れた合理的選択理論の教科書としてノーマン・ブラウン & トマス・ガウシ (マンハイム大学) 共著『合理的選択理論 (2011)』を挙げている。パラメトリックな合理的選択理論 (確実性下のそれと不確実性下のそれ) だけでなく、ストラテジックな合理的選択理論 (協力的ゲーム理論、非協力ゲーム理論) ナッシュ均衡のゲーム理論における鍵役割を解説している。ただ生憎なことに『社会科学におけるモデル構築とシミュレーション・ハンドブック』『合理的選択理論』とも、全文がドイツ語で執筆されており、ドイツ語を読めない読者には接近がかなわないのである。

9. 最後に、前稿でオランダ、ドイツの合理的選択社会学者の存在を知るのに格好の祝賀論文集を薦めたが、最近スイスの合理的選択社会学者の存在を知るのに格好の祝賀論文集が出た。アンドレアス・ディークマンを祝賀する論文集である。前稿で紹介したラオブ & フォス共著「社会学のミクロ-マクロ・モデル: コールマンダイアグラムの前身たち」もこの論文集に収録されたものである。前稿の祝賀論文集の祝賀された大物たちも寄稿している。この論文集はディークマンの弟子、ベン・ヤンとヴォイテク・プルツェピオルカの共編著『社会的ジレンマと制度と協力の進化』で、「基礎」「制度」「社会規範」「仲間の裁可」「信頼感と信頼性」「ゲーム理論」「実験法」の各部に25編が寄せられている。祝賀論文集の固定観念を脱するべく、副題から祝賀論文集の題を取り去り、専門書の体裁を取り、収録論文は覆

面の2名の執筆者の査読を受けて書き直しさせられている。編者の一人がスイス・チューリッヒの学窓出身ながら、オランダのユトレヒト大学のスタッフである関係で、オランダの若手研究者の寄稿論文も多い。この論文集はすべて英文で統一されている。8. で触れたハンドブックとこの論文集の執筆陣を見ると、ジグラー、オップ、エサーの祝賀論文集の執筆陣との世代交代の感を強くする。

#### 文献一覧

- Diekmann, A./T. Voss** 2016 “Rational-Choice-Rezeption in der deutschsprachigen Soziologie.” in S. Moebus/A. Ploder (Hrsg.) *Handbuch Gesichte der deutschsprachigen Soziologie*. S. 1-20. Wiesbaden : Springer.
- Hummell, H.J.** 1972 *Probleme der Mehrebenenanalyse*. Stuttgart : B.G. Teubner.
- Opp, K-D/H.J. Hummell** 1973 *Probleme der Erklärung sozialer Prozesse*. Bd. I *Kritik der Soziologie*. Bd. II *Soziales Verhalten und soziale Systeme*. Frankfurt : Athenäum.
- Ziegler, R.** 2011 “Deutschsprachige Netzwirkforschung.” in : C. Stegbauer/R. Haussing (Hrsg.) *Handbuch Netzwirkforschung*. S. 39-53. Wiesbaden : Springer VS.
- Vanberg, V.** 1975 *Die Zwei Soziologien. Individualismus und Kollektivismus in der Sozialtheorie*. Tübingen : Mohr Siebeck.
- 1982 *Markt und Organisation. Individualistische Sozialtheorie und das Problem korporativen Handelns*. Tübingen : Mohr Siebeck.
- 1994 *Rules and Choice in Economics*. Routledge.
- Homans, G.C.** 1972 *Grundfragen soziologischer Theorie*. Herausgeben und mit einem Nachwort versehen von Viktor Vanberg. Westdeutscher Verlag.
- Coleman, J.S.** [1974] 1979 *Macht und Gesellschaftsstruktur*. übersetzt und mit einem Nachwort von Viktor Vanberg. Tübingen : Mohr Siebeck.
- Alexander, J.C./B. Giesen/R. Munch/N.J. Smelser.** (eds.) 1987 *The Micro-Macro Link*. Univ. of California.
- Maurer, A.** 2017 *Erklären in der Soziologie. Geschichte und Anspruch eines Forschungs-programme*. Wiesbaden : Springer VS.
- Esser, H./K.G. Troitzsch** (Hrsg.) 1991 *Modellierung sozialer Prozesse : neuere Ansätze und Überlegungen zur soziologischen Theoriebildung*. Bonn : Informationszentrum Sozialwissenschaft.
- Coleman, J.S.** 1984 “Micro foundations and macrosocial behavior.” *Angewandte Sozialforschung* 12 (1/2) : 25-37.
- 1986 “Micro foundations and macrosocial theory.” in : Lindenberg, S. /J. Coleman/S. Nowak (eds.) *Approaches to Social Theory*. pp. 345-363. N.Y. : Russell Sage.
- 1987 “Microfoundations and macrosocial behavior.” in : Alexander, J.C./B. Giesen /R. Munch/N.J. Smelser (eds.) 1987 *The Micro-Macro Link*. pp. 153-73. CA : Univ. of California Press.
- Diekmann, A./T. Voss** 2004 “Die Theorie rationalen Handelns. Stand und Perspektiven” in A. Diekmann/T. Voss (Hrsg.) *Rational Choice Theorie in den Sozialwissenschaften. Problem und Perspektiven*. S. 13-29. München : Oldenbourg.
- Brüderl, J.** 2004 “Die Überprüfung von Rational-Choice-Modellen mit Umfragedaten.” in A. Diekmann/T. Voss (Hrsg.) *Rational Choice Theorie in den Sozialwissenschaften. Problem und Perspektiven*. S. 29-44. München : Oldenbourg.

- mann/T. Voss (Hrsg.) *Rational Choice Theorie in den Sozialwissenschaften. Problem und Perspektiven*. S. 163-180. München : Oldenbourg.
- Raub, W./T. Voss** 2018 “Micro-macro models in sociology : Antecedents of Coleman’s diagram.” in B. Jann/W. Przepiorka (eds.) *Social Dilemmas, Institutions and the Evolution of Cooperation*. pp. 11-37. Berlin : De Gruyter.
- Raub, W./V. Buskens/M.A.L.M. van Assen** 2011 “Micro-macro links and microfoundations in sociology.” *Journal of Mathematical Sociology* 35 : 1-25.
- Lindenberg, S.** 1976 “De structuur van theorieën van kollektive verschijnseln” in W. Arts/S. Lindenberg/R. Wippler (eds.) *Gedrag en structuur*. pp. 10-20. Rotterdam.
- 1977 “Individuele Effekte, kollektive Phenomene und das Problem der Transformation.” in K. Eichner/W. Habermehl (Hrsg.) *Probleme der Erklärung sozialen Verhaltens*. pp. 46-84. Meisenheim : Hain.
- Opp, K-D.** 2009 “Das individualistische Erklärungsprogram in der Soziologie. Entwicklung, Stand und Probleme.” *Zeitschrift für Soziologie* 38(1) : 26-47.
- Hummell, H.J.** 1969 “Psychologische Ansätze zu einer Theorie sozialen Verhaltens.” in R. König (Hrsg.) *Handbuch der empirischen Sozialforschung*. Bd. II S. 1157-1277. Stuttgart : Enke.
- Boudon, R.** 2001 *The Origin of Values. Essays in the Sociology and Philosophy of Beliefs*. New Brunswick.
- [1984] *La place du desordre*. Paris : Presses Universitaire de France.
- 1986 *Theories of Social Change. A Critical Appraisal*. Political Press.
- 1987 “The individualistic tradition in sociology.” in : J.C. Alexander et al. (eds.) *The Micro-Macro Link*. pp. 45-70. Univ. of California.
- Opp, K-D.** 2014 “The explanation of everything. A critical analysis of Raymond Boudon’s social theory.” *Revista de Sociologica* 99(4) : 481-594.
- Lindenberg, S.** 2000 “The extension of rationality : Framing versus cognitive rationality.” in J. Baechler/F. Chazel/R. Kamrane (eds.) *L’acteur et ses raisons : Melanges en l’honneur de Raymond Boudon*. pp. 168-204. Paris : Presses Universitaire de France.
- Esser, H.** 2001 *Soziologie : Spezielle Grundlagen*. Bd.6 : Sinn und Kultur. Frankfurt : Campus.
- 2003 “Die Rationalität der Werte” in : G. Albert et al. *Das Weber-Paradigma : Studien zur Weiterentwicklung von Max Weber Forschungsprogramm*. S. 154-188. Tübingen : Mohr Siebeck.
- Greve, J.** 2003 “Handlungserklärung und Die Zwei Rationalitäten? Neuere Ansätze zur Integration von Wert- und Zweckrationalität in ein Handlungsmodell.” *Kölner Zeitschrift*. 55(4) : 621-653.
- Braun, N./T. Gautschi** 2011 *Rational Choice Theorie*. Weheim und München : Juventa Verlag.
- Braun, N./N. Saam** (Hrsg.) 2014 *Handbuch Modelbildung und Simulation in den Sozialwissenschaft*. Wiesbaden : Springer VS.
- Jann, B/W. Przepiorka** (eds.) 2017 *Social Dilemma, Institutions and the Evolution of Cooperation*. Berlin : De Gruyter.